

# グラムシ『獄中ノート』の 若干の訳語訳文について

—人間論と「実践の転覆」—

鈴木 富久

キーワード：グラムシ，人間，活動的關係，実践，実践の転覆

## はじめに

翻訳の問題とは結局、原語・原文の意味解釈の問題にほかならない。とりわけグラムシの『獄中ノート』<sup>1)</sup>（全29冊、その他に翻訳ノート4冊、1929年～35年執筆。以下たんに『ノート』と略記する）の場合、この意味解釈のうえでにわかには判断を下しにくい事態に遭遇することが少なくないように思われる。そもそもが、非常に複雑な思考が短く圧縮された文章で書き留められた断片的な私的覚書の集積であり、公刊を予定したものとは異なって、読者を想定した敷衍、展開などが少なくとも十分ではないということがある。しかし他方で断片的な叙述形態とは裏腹に『ノート』の論述全体に潜む内的体系性と論理の一貫性にはただならぬものがあることを予想させもする。それだけに、個々の論述箇所の意味解釈にあたっては、他の箇所での諸議論と

1) Antonio Gramsci, Quaderni del carcere, Edizione critica dell'Istituto Gramsci, a cura di Valentino Gerratana, Giulio Einaudi editore, torino, 1975. (アントニオ・グラムシ『獄中ノート』グラムシ研究所校訂版、ヴァレンティーノ・ジェルラターナ編、エйнаウディ、1975年、全4分冊)

の関連に意を用いることが特に重要になる。

こうした事情から、『ノート』研究の進展にともなって、重要な用語や論述箇所においてさえ従来の訳語・訳文への見直しや修正の必要という問題が浮上してくるのは避けがたい。たとえばすでに、『ノート』におけるグラムシの将来社会を表す独有用語である「società regolata」（ソチエタ・レゴラータ）に関して、従来の一般的な訳語「規制された社会」あるいは「規制社会」は誤りであると批判され、新しい訳語として「自己規律社会」が提起されており<sup>2)</sup>、あるいはまた別の論者からは、従来「実践の転覆」と訳されてきた「rovesciamento della praxis」（ロヴェシヤメント・デッラ・プラクシス）を「実践の反転」と訳し、またすなおには「市民社会」としてしか読めないと思われる「società civile」（ソチエタ・チヴィーレ）でさえ、「倫理的な社会」と訳す試みが提唱されている。さすが、この「倫理的な社会」の訳語を受容する向きはあまりみられないようであるが、「実践の反転」の方は一定程度反響を見出しているようである。

本稿は、これらの新しい訳語の提起につき、これを受けて特に「実践の反転」に関して検討するとともに、加えて、最近の筆者の検討から『ノート』における人間論の一部、すなわちQ10Ⅱ §48B<sup>3)</sup>、Ⅱ「進歩と生成」最終段

- 
- 2) この提起者は松田博氏である。氏は、『獄中ノート』の脈絡のなかでの「市民社会による国家の再吸収」命題の検討を通じてこの提起をされ、最も原意に近いのは「自己統治・自己制御社会」とであると論じられている（松田博『戦後『市民社会』思想と『方法としてのグラムシ』：平田清明の市民社会像によせて』、佐々木喜代三・中川勝雄編『転換期の社会と人間』法律文化社、1996年。同「A・グラムシ：ヘゲモニー論の政治理論」、田口富久治・中谷義和編『現代の政治理論家たち』法律文化社、1997年）。またこれとは別に、福田静夫氏は、将来の「社会での規則は、内発的なものとなることをグラムシは想定しているから…『制』よりも『整』の方がいい」との理由を記し、「暫定的」と断りつつ「規整された社会」と訳されている（福田静夫「イタリアにおけるグラムシ研究管見」『日本福祉大学研究紀要』竹村英輔教授追悼号、98号第2分冊、1998年3月、104頁）。
- 3) 本稿で、Qは『獄中ノート』（前掲、ジェルラターナ版）を表し、その次の数字は各冊のノート番号を、§は各ノート内の覚書に記された番号（覚書番号）を示す。また、「Q10Ⅱ」の「Ⅱ」は、Q10内の第Ⅱ部であることを示す。なお頁番号は、ジェルラターナ版のそれである。さらにBとは、この覚書が初稿のみで終わって

落の人間論に関する叙述の訳文に関して、その先行訳も含めて再検討しようとするものである。この二つの問題は一見無関係に見えようが、実はある重要点で内容的に関連している。そこでまずは本稿で、この二つを並べて取りあげるわけである。その関連は、行論の過程で明らかになるはずである。議論の都合上、後者の問題から始めることにする。

## 1. 「進歩と生成」最終段落の人間論

### 1. 最終段落・人間論の全文（改訳）

Q 10 II § 48B, II 「進歩と生成」（pp.1337-38）は、その最終段落を除いて合同版『グラムシ選集』第I巻（281-283頁）に訳出、収録されているのであるが、ここで問題にする人間論は、その収録されていない最終段落として論述されているものである。とはいえ、そこに欠けていたその最終段落の邦訳は、事実上、竹村英輔氏の一連の論稿<sup>4)</sup>において果たされた。しかし筆者は、その訳文に若干の異見を抱き、筆者自身の試訳を提起したことがある<sup>5)</sup>。ところが現時点では、その拙訳にも疑点が生じ、さらに訳文の表現を変えたい箇所もある。そのため、改訳を試み、その際、ここで検討する箇所に下線を引いて便宜上、記号〈a〉、〈b〉を付したものをまず掲げることにする。

「問題はつねに同じであり、つまり人間とは何か、人間的本性〔natura umana〕とは何かということである。もし人間を心理学のおよび思弁的に個人として

---

おり、最終稿が執筆されなかった覚書であることを表す。『獄中ノート』の覚書には、この他に初稿と最終稿の2種があるものが少なくない。この場合、初稿をA、最終稿をCの記号で表している。なお、引用で邦訳のあるものについては、「合」で合同版『グラムシ選集』（全6巻）を、ローマ数字で巻数を表し、該当頁番号を示すが、訳文は同一と限らない。

- 4) 代表的には、竹村英輔『現代史におけるグラムシ』青木書店、1989年、177-178頁。「事実上」というのは、同書の議論のなかで「最終段落」が2つに分割されて引用、訳出されており、読者にはそれが「最終段落」の全体であるのかどうかは判らないからである。
- 5) 拙稿「グラムシ『獄中ノート』における哲学的人間論の展開」、前掲『日本福祉大学研究紀要』、130-132頁。

規定すれば、進歩と生成という如上の諸問題は解決不可能であり、あるいはただの言葉の問題にとどまる。だが、人間を社会的諸関係の総体として理解するにしても、時代の違う人間たちを比較することは、異質でないにしろ違うものが問題なので、さしあたり不可能に思われる。しかし他面、人間はその生活諸条件の総体でもあるゆえに、人間が自然と境遇を支配する程度を測定することはできるので、過去と現在の相違を量的には測定しうるのである。可能性は現実性ではない、がしかし、可能性もまたそれで一つの現実である。だから、人間が、あることをなし得るか、なし得ないかは、現実になすことの考量にとり重要である。可能性は『自由』を意味する。自由の程度ということが、人間観に入り込む。餓死しない客観的可能性があるのに、餓死しているということは、明らかにそう思われる限り、重要な問題だ。実際、客観的諸条件ないし可能性あるいは自由の存在ということでは、まだ十分でない。『それを認識し』、その役立て方を知っていることが必要である。それを自分に役立てようと欲することだ。この意味で、人間は、具体的意思、すなわち、抽象的な欲求〔volere〕ないし生の衝動〔impulso vitale〕の、このような意思を実現する具体的諸手段への実際の適用〔applicazione effettuale〕である<sup>6)</sup>。人は自己自身の人格性を創造するが、それは、(1)自己の生の衝動ないし意思に特定の具体的な(『合理的な』)方向を与えて、(2)このような意思を恣意的でない特定の具体的な意思とする具体的諸手段を確定し、(3)〈a〉この意思を実現するところの具体的諸条件の総体を変更することに、自己の能力の限界内で最も実り多い形態で寄与することによってである。〈b〉人間は、純個人的・主観的諸要素と、その個人が活動的に関係しているところの〔é in rapporto

6) このセンテンスは、旧訳では「人間は具体的意思、すなわち抽象的な欲求の実際の適用、あるいはこのような意思を実現する具体的諸手段をもつ生の衝動である」と訳していた(同上、131頁)。これを本文のように訂正したのであるが、これについては、その経過ないし事情を含めて、すでに拙稿「グラムシ『人間とは何か』解析試論——『獄中ノート』における哲学的人間論の展開・その2——(上)」『桃山学院大学総合研究所紀要』第25巻第1号、1999年9月、53頁およびその注記8、に記した(この拙論を全体の一部として納めた平成11年度～平成13年度科研費研究成果報告書『アントニオ・グラムシ著「獄中ノート」の社会学史的比較のための基礎研究』2002年3月、においては6頁およびその注記8)。

なお、「実際の適用」と訳した箇所は、「applicazione」についても「effettuale」についてもさらに検討が必要であるように思われる。このうち「effettuale」という形容詞は、たとえば「realtà effettuale」など、『獄中ノート』において頻繁に使用される重要語であるが、その意味の確定も残されたままの課題であろう。ただ、

attivo=活動的關係にあるところの] 集団の諸要素 [構成員たち] [elementi di massa] ならびに客観的・物質的な諸要素との歴史的ブロックとして考えられるべきである。外界を、全般的諸關係を、変更することは、自己自身を強くし、自己自身を發達させることを意味する。倫理的『改善』は純個人的なことであるというのは、錯覚であり誤謬である。つまり、個性の構成諸要素の総合が『個人的』なのである。けれどもその総合は、自然に対する諸關係から、ついには全人類におよぶ最大の關係に達するところの生を取り巻くさまざまな社会的範囲のさまざまな程度の他の人々に対する諸關係にいたる、外的諸關係を変更する外部に対する活動なしには、実現せずまた發達しない。したがって、人間は本質的に『政治的なもの』であると言うことができる。というのも、意識的に他の人々を変え、指導することをめざす活動が、その人の『人間性 [umanità]』、その人の『人間的本性 [natura umana]』を実現するからである。」(Q., pp.1337-1338.)

## 2. 人格性創造の第3条件

上の拙訳において、「人は自己自身の人格性を創造するが」として(1)(2)(3)と記されている一文に、人格性創造の3条件を示した箇所として注目したのは竹村氏であった<sup>7)</sup>が、第3条件(3)つまり〈a〉について上に示した訳文は、その原文の読み方が、竹村氏の訳とも、かつての拙訳とも異なっている。さらに、現在提示されている片桐薫氏による訳とも異なっている。まず原文を掲げておこう。

[原文] «contribuendo a modificare l'insieme delle condizioni concrete che

---

おそらくマキアヴェッリ『君主論』に見られる«verità effettuale»に関係しているであろうということはできそうである。ちなみに、この語は、池田廉訳『君主論(新訳)』(中公文庫、1995年)では「生々しい真実」(90頁)と訳されており、これについて注記で「『事実から引き出される真実』の意味。ただし、effettualiの語は、reale(現実の)の語よりもさらに『生々しい』(リジオ注)」(185頁)と説明されている。かつて筆者は、この指摘にならって、グラムシの«realità effettuale»を「生々しい現実」と訳したことがある(拙稿「国家概念の拡大と現代の市民社会——A・グラムシ」, 小林一穂・大関雅弘・鈴木富久・伊藤勇・竹内真澄『人間再生の社会理論』創風社、1996年、第3章、153頁)。

7) 竹村, 前掲, 59頁。

realizzano questa volontà nella misura dei propri limiti di potenza e nella forma piú fruttuosa. »

これにたいする竹村氏の訳文は次の通りであった。

〔竹村訳〕「自己の力量の限界内でもっとも成果のある形態でこの意志を実現する、具体的諸条件の総体を変更することに寄与することによって、である。」

ここから、竹村氏は、副詞句「自己の力量の限界内でもっとも成果ある形態で〔nella misura dei propri limiti di potenza e nella forma piú fruttuosa〕」が、*«che»* 以下の従属節の動詞「(この意思を) 実現する〔realizzano〕」に係るものと解されたことが判る。

これに対して筆者がかって提示した訳は、上記の副詞句が、「実現する」ではなく「変更する〔modificare〕」に係るのではないかと読み、「この意志を実現する具体的諸条件の総体を、自己の能力の限界内で最も実り多い形態に変更することに寄与することによってのことである」とするものであった<sup>8)</sup>。しかしながら、この旧拙訳と竹村訳とは、「…変更することに寄与することによって」と読んだ点では同一である。だが考えてみれば、「実現することに寄与する」とはいかなる意味なのであろうか。竹村訳においても、旧拙訳の場合にも、その点が明確でない。単に「実現することによって」と記すだけで足りるのではいか。ところがグラムシは、わざわざ「(実現すること) 寄与することによって」と書いている。なぜなのか。この点が一つの問題として残る。

これらに対して片桐氏の訳文は、また独自であり、上記のいずれとも異なっている。次の通りである。

〔片桐訳〕「自らの能力の限界と範囲内で、またより実り多い形でこの意思を実現するために、全体として具体的諸条件の変革に寄与することによってである。」<sup>9)</sup>

8) 前掲、拙稿「グラムシ『獄中ノート』における…」、131頁。

9) 片桐薫編『グラムシ・セレクション』平凡社、2001年、272頁。なお、人格性創造の第1条件に関する文中の、本稿では「…具体的な(『合理的な』)方向を与えて」と訳した箇所、丸括弧内「合理的な」の原語は*«razionale»*であるが、片桐氏の

ここでは、副詞句「自らの能力の限界と範囲内で、またより実り多い形で」が「実現する」に係ると読む点で竹村氏と同一でありながら、この「実現する」が「具体的諸条件（の総体）」を先行詞とする関係代名詞 «che» で繋がっていると読むのではなく、この «che» を「…ために」を意味するものと解されているのである。このような読み方は、片桐氏以外にも存在し、その先行例を英訳『獄中ノート選集』にみることができる。次の通りである。

〔英訳〕 «by contributing to modify the *ensemble* of the concrete conditions for realising this will to the extent of one's own limits and capacities and in the most fruitful form.»<sup>10)</sup> (下線は引用者)

片桐訳は、この英訳文とはほぼ同一の解釈にたっていると思われる。しかし、原文の・che・を、文字通りには「…ために」と読むのは困難であろう。文法的にみて、・che・に続く動詞 «realizzare» (不定形) が、その語尾変化によって接続法で用いられていれば、«che» を接続詞用法と解して、«che realizzare» を「実現するように」と読まねばならないであろうが、原文では «che realizano» と書かれており、この動詞は3人称・現在・直説法で表されている。そうである限り、・che・は関係代名詞として用いられていると解するのが妥当であろう。そのように解した訳文が、次の仏語訳である。

〔仏訳〕 «en contribuant à modifier l'ensemble des conditions concrètes qui réalisent cette volonté dans la mesure des limites de sa puissance et dans la forme la plus fructueuse.»<sup>11)</sup>

この仏訳文は、もともと仏語がラテン系言語として伊語と同一言語圏に属しているだけに、伊語原文をそっくりそのまま仏語に移した訳文になっているのであるが、注目したいのは、問題の «che» は明確に関係代名詞として読まれ、まさしく関係代名詞 «qui» がそこに当てられていることである。ついでに独語訳をみてみれば、次の通りになっている。

同書同頁では、「“合目的” な」と訳されている。

10) *Selections from the Prison Notebooks of Antonio Gramsci*, edit. & trans. by Q. Hoare and G. N. Smith, Lawrence and Wishart, London, 1971, p.360.

11) Antonio Gramsci, *Cahiers de prison*, Cahiers 10, 11, 12 et 13, Gallimard, 1978, p.136.

〔独訳〕 «indem dazu beigetragen wird, das Ensemble der konkreten Bedingungen zu verändern, die diesen Willen nach Maßgabe der eigenen Machtgrenzen und in der fruchtbarsten Form verwicklichen.»<sup>12)</sup>

これは、竹村訳と同一の解釈に立っているといえよう。だがそれでは、前述の問題、すなわち、なぜ単に「実現する…」で終わらず、「実現することに寄与する…」とわざわざ書かれているのか、という疑問が再び浮上する。

そこで、この点を重視して、いっそ副詞句「自己の能力の限界内で最も実り多い形態で」を「寄与する」に係ると読んでどうか。そのように読んだものが、前節に示した訳文〈a〉である。すなわち再出すれば、

「この意思を実現する具体的諸条件の総体を変更することに、自己の能力の限界内で最も実り多い形態で寄与することによってである。」

というものである。

このような原文の読み方は、その文面から（したがって仏訳文からも）一義的に決まってくるものではないが、しかし不可能であるわけではない。意味の上から考えれば、「寄与する (contribuire)」とは、何らかの共同的な事業・目的・課題の達成等に参加し、その一端をなにかがしか担うことである。上記のように読むことによって、この意味が生きてくる。つまり、人格性創造の第3条件(3)で言われていることは、「この意思を実現するところの具体的諸条件の総体を変更すること」が、ある共同的な意味を有しており、それに「寄与することによって」、その人の人格性が創造される、ということになり、なぜ「寄与する」とわざわざ言うのか、その意味が明確になる。ここで「この意思」とは、第1条件(1)における規定から、「恣意的でない」「具体的な（『合理的な』）意思」となった自己の意思である。そして、「合理的な」という語は、グラムシにおいては、たとえば、「問題は、恣意的な創造か、それとも合理的な、すなわち、人々の生活観をひろげ、生活そのものを高める（発展させる）のに、人々に『有用な [utile]』、創造かどうか<sup>13)</sup> というよ

12) Antonio Gramsci, *Gefängnishefte*, Band. 6, Argument-Verlag, 1994. S.1341.

13) Q 15 § 10C, p.1766. 合IV, 17頁。グラムシの合理性概念については、拙稿「『合

うに使われる言葉であった。つまり、グラムシの「合理的な」は「人々の…発展…に…『有用な』」という意味をもつ。だから、第3条件での「寄与する」は、まさしく「人々の…発展に」寄与することであり、第1条件での「合理的な」とつながっている。前記のように読むことで、このつながりが浮上するだけでない。原文において、この一文に続くのが、前記拙訳〈b〉にみられるように、「歴史的ブロック」としての人間の概念であり、そこで議論の具体性が増し、明示的に他の人々との関係が語られるに到るが、こうした議論の運び方とも適合的な解釈であり、そのことがさらなる裏づけとなるのだ、ともいえよう。

### 3. 歴史的ブロックとしての人間の構成要素

とはいえ、「歴史的ブロック」としての人間概念を示したくだり〈b〉は、これまで、拙訳とは異なる仕方でも訳されてきた。竹村氏の場合、「人間は純個人的・主観的な諸要素と、個人が能動的諸関係をたもつ大量の客観的あるいは物質的諸要素との歴史的ブロックとして考えられるべきである。」<sup>14)</sup>との訳がとられていることについては、以前別稿<sup>15)</sup>でふれたことがある。これに対して片桐氏の近訳書においては、「人間は、個人的ないし主観的要素と、個人が積極的にかかわっている客観的ないし物的要素との、歴史的ブロックとして理解されなければならない。」<sup>16)</sup>と訳されており、竹村氏が「大量の」と解された箇所が抜けている。

問題は、その「大量の」と訳された箇所であるが、その箇所に下線を付して〈b〉の原文を見てみよう。

---

理性』概念の二つの位相」、松田博編『グラムシを読む』法律文化社、1988年、第3章、参照。

14) 竹村、前掲、178頁。

15) 前掲、拙稿「グラムシ『獄中ノート』における…」、134頁、および、その稿の注記14（145頁）。

16) 片桐、前掲、272頁。

«L'uomo è da concepire come un blocco storico di elementi puramente individuali e soggettivi e di elementi di massa e oggettivi o materiali coi quali l'individuo è in rapporti attivi.» (下線は引用者)

この原文をみるかぎり、竹村訳のように、下線部 «di massa» を「大量の」と読むことは確かに可能であることをまず断っておかねばならない。この文面だけでは確定しがたいというのが事実であろう。では、いかにしても確定しえないかと言えば、決してそうではない。その決定的な手がかりが、この覚書の6つ後の覚書 § 54 B 「哲学研究入門。人間とは何か」に記されている。つまりそこには、「人間を、そこでは個性が最大の意義をもつとしても考察すべき唯一の要素ではないところの一連の活動的諸関係（一つの過程）として理解しなければならない。各々の個性性に反映している人間性は、いくつかの要素、すなわち(1)個人、(2)他の人間たち、(3)自然から構成されている。…個人は…諸有機体の部分になる限りにおいて他の人間たちと関係する」<sup>17)</sup>と記されており、この(2)が、問題の〈b〉における «elementi di massa» (集団の諸要素 [=構成員たち]) に該当し、(3)は «elementi ... oggettivi o materiali» (客観的ないし物質的諸要素) に該当することは、どこから見ても明かであるからである（なお行論上、上記の「歴史的ブロック」論のなかでも、また「人間とは何か」においても、「rapporti attivi」（活動的諸関係）という語が使われていることに注意しておいていただきたい）。

このように、2種の要素ではなく、3種の要素の「歴史的ブロック」と読むことによって始めて、前述のように、人格性創造の第3条件を拙訳〈a〉のように訳することの適切さも再確認されるし、そこにグラムシの議論の一貫性を読み取ることも可能になるであろう。〈b〉の後に続く議論が、自己を取り巻く「外界」、自己がとり結ぶ「全般的諸関係」を「変更する」ことが自己を強化、発展させるのであり、だから「『倫理的』改善」を「純個人的なこと」と考えるのは「錯覚」「誤謬」であると言われて、「…他の人々に対

---

17) Q., p.1345.

する諸関係…を変更する…活動なしには、実現せずまた発達しない」と展開されていることも、拙訳のように読まねばならないことを裏づけているように思われる。

## 2. 実践の「転覆」か「反転」か——«rovesciamento della praxis»

### 1. 問題の所在

従来「実践の転覆」と訳されてきた «rovesciamento della praxis»<sup>18)</sup> を「実

18) 上村忠男氏は、『ノート』にこの語が出てくる箇所は「すくなくとも四箇所」あると指摘され（同氏編訳『知識人と権力』みすず書房、1999年、159頁）、すでにその4箇所は、氏の論稿「唯物論と『反転する実践』—グラムシをめぐる①」（『批評空間』第Ⅱ期第15号、1997年10月）において示されていた。筆者も今のところ4箇所を見いだしているが、上村氏の場合と同一箇所である。読者の便のため、あえてそれを提示することにする。

- (1) 「構造と上部諸構造とは一つの歴史のブロックを構成する。すなわち上部諸構造の複雑で不和な [complesso e discorde] [行間に異文「矛盾した」が書き込まれている一編者注] 総体は社会的生産諸関係の総体の反映である。そこから、全体的 [totalitario] イデオロギーの一つの体系 [実践の哲学—引用者註] だけが構造の矛盾を合理的に反映し、il rovesciamento della praxis のための客観的諸条件の現存を表現するということが引き出される。もし、このイデオロギーで100パーセント等質的な社会集団が形成されるならば、それはこの転覆のための前提が100パーセント現存しているということ、いいかえれば『合理的なもの』が事実として現に現実的であるということの意味している。推論は、構造と上部諸構造との間の必然的相互性 [reciprocità = 相互関係] (まさに現実的な弁証法的過程である相互性) にもとづくのである。」 Q8 § 182B, P.1051-2. 合 I P.289-9.
- (2) 「すなわち、経済的矛盾は政治的矛盾となり、un rovesciamento della praxis において政治的に解決されるのである。」 Q10 II § 33B, p.1279. 合 II, 「利潤率の低下」82頁。
- (3) 「それら [諸イデオロギー] は、現実の歴史的事実であり、道徳性等々の理由によってではなく、政治的闘争という理由によって、すなわち被統治者を統治者から知的に独立させるために、rovesciamento della praxis の必然的契機として、一つのヘゲモニーを破壊して別のヘゲモニーを創造するために、それと闘い、支配の道具というその本性をあばかなければならないものである。」 Q10 II § 41X II, C, p.1319. 合 II, 124頁。なおこのA稿 (Q4 § 15, 20, および22) には «rovesciamento della praxis» の語は見られない。
- (4) 「[「ブハーリンにおいては】因果性の法則や、規則性、常態性、斉一性の研究が史的弁証法を押しつけている。こんな発想の仕方からどうして超克 [superamento], il «rovesciamento della praxis» を演繹できるのか。結果は、機械的には、

践の反転」と訳され、従来の訳を「反転・転覆」する新訳を提唱されたのは、上村忠男氏である<sup>19)</sup>。この提唱が、従来訳の「反転・転覆」であるというのは、「実践の転覆」という訳は「実践を転覆すること」という意味であるのに対して、上村氏の「実践の反転」は「実践が反転すること」を意味するからである。つまり、前者では「実践」は、主体により転覆されるもの、したがって主体的な転覆行為の対象としての位置におかれるのであるが、後者では逆に「実践」自体がみずから運動しやがて反転するところの一つの主体であるかの如くの観を呈することになるわけである。だからいずれの訳をとる

---

原因ないし諸原因の体系をけっして超克しえておらず、したがって進化論の平板で卑俗な進展しかもちえない。」Q11 § 14C, p.1403. 合II, 174頁。これのA稿(Q8 § 186)にも«rovesciamento della praxis»の語は見られない。

なお、上記(1)に見られるように、グラムシは「実践の転覆」の概念を史的唯物論の「構造-上部構造」関係の枠組み内で位置づけても考えていた。このことは上村氏も重視しておられる。だが本稿では、この点に立ち入る余裕はないため、参考までに、上村氏も挙げておられる『ノート』のなかの一つの言及を掲げるにとどめたい。クローチェの論難に対して、史的唯物論(実践の哲学)を擁護した次の言及である。

「実践の哲学が逆に構造と上部構造との発展を、内的に連関のある、必然的に相関的〔interrelativo〕かつ相互的〔reciproco〕であるものとして把握しているときに、それが構造を上部構造から『切り離した』ということは真でない。構造は、たとえ比喩としてであれ、『知られざる神』になぞらえることはできない。それは自然科学と精密科学の諸方法で研究されうというまでに超現実主義的〔ultrarealistico〕な仕方では理解されているし、むしろ、まさに客観的に検証できる、構造のこの『首尾一貫性』によってこそ、この歴史観は『科学的』だと考えられてきたのであった。おそらく、構造は不動な絶対的なものとして把握され、あるいは逆に、運動している現実そのものとしては把握されないし、『教育者が教育されなければならない』という『フォイエルバッハに関するテーゼ』の主張は、構造に対する人間の能動的な反作用の必然的関係を主張し、現実の過程の統一性を肯定するのではないと言うのであろうか。ソレルによって構成された『歴史的ブロック』の概念は、まさしく、実践の哲学によって主張されたこの統一性を完全につかんだのであった。」Q10 II § 41, I, C, p.1300. 合II, 113-4頁。

- 19) 氏は、本文で後述する論説「はじめに誤訳ありき？」以降、同氏編訳書『新編・現代の君主』（青木書店、1994年）の「編訳者あとがき」（327-8頁）や、前掲「唯物論と『反転する実践』」、前掲『知識人と権力』（156-159頁）などで、この提唱ないし主張を繰り返し、上記「唯物論と『反転する実践』」では、その主張をジェンティーレ、モンドルフォと対比しながら詳しく論証を試みられておられる。

かは、単に訳語表現の問題にとどまらず、グラムシの哲学思想すなわち「実践の哲学」のまさに中心概念である「実践」をどのように理解するのかという基本的な問題に関わっているのである。

『ノート』のなかで «rovesciamento della praxis» という語が最初に現れるのは、Q7の冒頭に執筆される一連のマルクス諸著作の翻訳のなか、すなわち、その翻訳の劈頭に位置づけられた「フォイエルバッハに関するテーゼ」（エンゲルス版<sup>20)</sup>。以下Fテーゼと略記する）の翻訳においてのことである。グラムシは、そのF第3テーゼのなかの «umwälzende Praxis»（変革的实践）を «rovesciamento della praxis» と訳したのである<sup>21)</sup>。この語の文脈を見ておくためにも、F第3テーゼ自体をグラムシとともにエンゲルス版で確認しておこう。

「人間は環境と教育の所産であり、したがって変えられた人間は別な環境と改められた教育との所産であるという唯物論的教説は、環境がまさに人間によってこそ変えられること、そして教育者自身が教育されねばならぬことを忘れてゐる。それゆえこの教説は社会を二つの部分——そのうちの一方の部分は社会を超えたところにある——に分けることになるのは必然である。（たとえば、ロバート・オーエンの場合。）／環境の変更と人間的活動との一致はただ変革する実践 [umwälzende Praxis=変革的实践——引用者注] としてのみとらえられうるし、合理的に理解されうる。」<sup>22)</sup>

このエンゲルス版で «umwälzende Praxis» と書かれてある箇所は、実はマルクス自身は «revolutionäre Praxis»（イタリック。革命的实践）と書いていたのであるが、エンゲルスによるこの語の変更という問題については、ここで

20) 最初エンゲルスによって1888年に発表された。グラムシの底本は、これを納めたレクラム文庫のマルクス文選（Karl Marx, *Lohnarbeit und Kapital, Zur Judenfrage und andere Schriften aus der Frühzeit*, Zweite Auflage, Ausgewählt und eingeleitet von Erunft Drahn, Verlag von Philipp Reclam jun., Leipzig.）である（発行年不明）。

21) ジェルラターナ版（注記1）には、Q7冒頭の翻訳文の一部が、第3分冊の最終部に納められている。Fテーゼの翻訳は同2355-2357頁に収録されており、第3テーゼは同2356頁に見られる。

22) *Werke*, band. 3., S.533-4. 『マルエン全集』第3巻, 592-3頁。

問題とはしない。意味に違いはない。ともあれ、グラムシは、エンゲルス版をテキストにして、その「*umwälzende Praxis*」を「*rovesciamento della praxis*」と訳したのであるが、そのような訳をとったことには、当時のイタリア思想界における特殊な経緯が背景にある。それをここで詳述できないが、この始まりは最初にジェンティーレが、上の「*umwälzende Praxis*」を「*prassi rovesciata*」と訳したことにあった。上村氏は、この経緯にふれているN.ボッビオの著作の邦訳『イタリア・イデオロギー』（馬場康男・押場靖志訳、未来社、1993年7月。121-122頁に上の経緯がふられている）に「解説」を寄せておられるのであるが、その訳書の発行の直後に、ジェンティーレによる上記の訳に関して「はじめに誤訳ありき？」と題する論説を記され、次のように述べられている。

「…この文脈でなぜ『革命的』とか『変革的』とかといった形容詞がなければならぬのか、いまひとつ腑に落ちないものがあつた。／そこで、ほかの解釈もないのかとおもいつつ、ジョアヴァンニ・ジェンティーレの『マルクスの哲学』（一八九九年）をのぞいてみたところ、なんと“*prassi rovesciata*”とあるではないか。そのまま訳せば『反転した実践』または『裏返しになった実践』というようになる。現在分詞形で表現すべきところが過去分詞形になってしまっているのだが、決してケアレス・ミスではない。『教育者みずからが教育されることにならざるをえない』という文言を弁証法的に『実践の反転』というように解釈したうえで意識的にえらびとられた訳語なのだ。『教育者も教育されないままでいるということはあるにない、とマルクスはいう。ほら見られたい、ここにおいて実践は、その本性によって、反転するのだ。それは活動をおこなって、対象へと固定される。かくて、それは矛盾におちいり、矛盾は止揚されて総合が達成される。教育する者が教育される者となり、教育される者が教育する者となる。これが実践のたどる必然的な発展の経路なのである』。ジェンティーレ二十三歳、当時のわたしと同年のころの著作である。わたしはすっかり感じってしまった。／グラムシによるマルクス主義理論の『創造的』発展がこの『実践の反転』にかんする若き日のジェンティーレの解釈を主要な源泉のひとつにしていることがわかったのは、もうすこし後のことであつた。」<sup>23)</sup>

この上村氏の論述の後半『』の部分は、ジェンティーレ『マルクスの哲学』の該当箇所<sup>24)</sup>の訳出、紹介である。そこにみるように、ジェンティーレにおいて「実践は、その本性によって、反転する [la prassi…per la sua natura, si rovescia (…自らを反転させる)]」ものであり、「これが実践のたどる必然的な発展の経路なのである」と解されている。だから「実践」は、「本性」的・「必然的」に自己運動・自己展開=転回する主体的なものであるかに解されていることになる。ジェンティーレの訳 «prassi rovesciata» は、こうした「実践」概念の表現なのである。だから、このジェンティーレの「反転された実践」は「実践の反転」と言い換えてもよいわけである。事実ジェンティーレ自身、上村氏により指摘されているとおおり<sup>25)</sup>、注解のなかでは、この意味で «rovesciamento della prassi» とも表現している<sup>26)</sup> ことを確認しうる。

だが問題は、グラムシ『ノート』の「実践」概念も同じような性質をもつ概念なのかということである。

## 2. グラムシの実践概念

こうして問題は、不可避免的にグラムシ「実践」概念をいかに理解するかという問題になる。とはいえ、ここでそれを十分になすことはとうてい不可能である。ただ最小限、彼の「実践」概念は、つねに主体の実践、人間の変革的活動であり、またその対象としての「現実」と分離できず、その意味での具体的な概念であることについては指摘しておく必要がある。周知のように彼の現実観は、「それ自体により、それ自体において、それ自体のためにあ

23) 『未来』1993年9月号、未来社、1頁。

24) Giovanni Gentile, *Opera filosofiche, Antologia a cura di E. Garin*, Garzanti, Milano, 1991, p.146. なお本書の註(139頁)によれば、ジェンティーレは1937年に文中の«praxis»をイタリア語の«prassi»に改変している。

25) 上村、前掲「唯物論と『実践の反転』」、107頁。

26) G. Gentile, *op.cit. Opera*, pp.187-8, p.190.

る『現実』が存在するのではなく、それを変革する人間たちとの歴史的関係において存在するのである」<sup>27)</sup>、という彼自身の言明によく表されているが、この「それを変革する人間たちとの歴史的関係」とは、言い換えれば「現実」に対する歴史的な、人間たち自身の活動的關係に他ならない。

ここで指摘したいのは、この「活動的關係」の概念は、前章で注意を促したように、「歴史的ブロック」としての人間の概念規定の箇所ですで見えてきたし、§ 54「人間とは何か」においては、「人間を…一連の活動的諸関係（一つの過程）として理解しなければならない」と述べられていたのであった。後者の覚書には実は、その論述のはじめの方で「人間とは一過程、正確には、彼の諸行為の過程である」と述べられている。人間を「彼の諸行為の過程」として把握するとはいかなる意味であろうか。それは、人間を、不変の固定的、静止的なものとしてでなく、自己を自己自身で生成させる、つまり自己の対象に対する自己の変革的活動を通じて生成させる存在として、そのようにして不断に自己自身を自己の活動を通じて生成させ、変化させる自己媒介的な生成過程として捉えるということである。ここで、対象に対する変革的活動が、対象に対する「活動的關係」なのである。だから実は、上記の「歴史的ブロック」とは、「個人」が自己の活動的關係を通じて、単なる「個人（ないし個性）」を超えて一個の「人間」、一つの「歴史的ブロック」たる「人間」、すなわち歴史具体的な「人間」に生成する存在（一過程）であることを表している概念であったのである。

これを踏まえた上でさらに重要なのが、グラムシにおいては、この人間の活動的關係を通じた自己生成の過程は、他面において同時に対象的な「現実」の具体的な生成過程にほかならないことである。グラムシはいつている。

「われわれは人間との関係においてのみ現実を認識するのであり、人間が歴史的生成であるように、認識と現実もまた一つの生成であり、客観性もまた

---

27) Q 11 § 59B, p.1486.合 I, p.266.

一つの生成である。』<sup>28)</sup>

ともに生成として把握される人間と現実、この人間観と現実観はマルクスFテーゼに由来し、特にその第1テーゼの現実観に基づいている。第1テーゼを確認すれば、次の通りであった（但しこれも、エンゲルス版で見ることにする）。

「これまでのあらゆる唯物論——フォイエルバッハのをもふくめて——の主要な欠陥は対象、現実、感性がただ客体の、または観照の形式のもとでのみとらえられて、人間的な感性的活動、実践として、主体的にとらえられないことである。それゆえ能動的〔tätige=活動的〕側面は、唯物論に対立して観念論によって——しかしただ抽象的にのみ展開されることになった。というのは観念論はもちろん現実的な感性的な活動をそのようなものとしては知らないからである。フォイエルバッハは感性的な、思惟客体とは現実的に区別された客体を欲するが、しかし彼は人間的活動そのものを対象的活動としてとらえない。それゆえ彼は『キリスト教の本質』においてただ観想的態度のみを真に人間的な態度とみなし、それにたいして、他方、実践はただそのさもしくユダヤ人間的な現象形態においてのみとらえられ、固定される。それゆえ彼は『革命的な』活動、『実践的批判的な』活動の意義を理解しない。』<sup>29)</sup>（傍点はイタリック）

グラムシは、ここに見る「対象、現実、感性」を「実践」（「人間的な感性的活動」・「対象的活動」）として「主体的に」把握するという観点を、活動的關係を通じた「現実」のまさに具体的な「現実」<sup>30)</sup>としての生成を主張する観点として読んだのだ、ということができよう。

28) Q 11 § 17C, p.1416.合Ⅱ,p.187. なお、A稿Q 8 § 177, p.1049には「と現実」はない。

29) Werke, band. 3., S.533. 『マルエン全集』第3巻, 592頁。

30) グラムシが、「現実〔realtà=実在〕」の具体的な把握を強調し、抽象的把握をいかに退けたかを示す言及として、さしあたり以下の言及を挙げておきたい。

(1) 「人間を離れて〔fuori di=～と無関係に〕実在を求めることは、実在を宗教的、形而上学的に理解することであり、逆説としか思われぬ。人間なくして宇宙の実在とは何を意味するのか。…この人間がもし無ければ「客観性」とは何であるのか。もしそうしたことが言えらばしたら、それは混沌である、つまり無であり空虚である。…実践の哲学にとって、存在を思惟から、人間を自然から、活動を物質から、主観を客観から引きはなすことはできない。このような分離をあえてするならば、宗教のあの多様な形態の一つか、無意味な抽象に陥る。」

だが、それだけでない。グラムシは、このF第1テーゼにおいては、この“実践としての現実”つまり、実践的活動を通じて生成するものとしての具体的現実、これを捕捉するだけでなく、さらにもう一つの実践次元、特殊な実践の次元としての、この現実を変革する『『革命的な』活動』＝『『実践的批判的な』活動』の次元の存在にマルクスが言及していることを見落とさなかったものであり、本稿では、この点がきわめて重要である。なぜなら、この『『革命的な』活動』こそ、第3テーゼにおける「革命的実践」そのものであり、前述のように、それをエンゲルスは「*umwälzende Praxis*」（変革的実践）と変更したのではあるが、意味は変わらず、それをテキストにしたグラムシの「*rovesciamento della praxis*」とは、その訳語にはほかならないからである。この訳語においてグラムシが言わんとしたことは、既存の現実を変革する「変革的実践」とは、その現実が既存の様式における実践によって生成している限り、ラディカルに言い換えれば、その既存の実践様式を変革、転覆することにほかならないということである。

---

Q 11 § 37C, p.1457. 合IV, 269頁。

- (2) 「超歴史的、超人間的な客観性が存在することは可能であるように思われるが、しかし、このような客観性について判断するのは誰なのか。誰がこの一種の『宇宙自体の見地』にたつことができ、そしてこのような見地は何を意味するのか。これが、神の観念、まさしく知られざる神についての神秘主義思想における神の概念の残滓であるということは、きわめて容易に主張できることである。」Q 11 § 17C, p.1415-6. 合II, 186-7頁。
- (3) 「抽象的な自然力としては、電気は、生産力になる以前にも存在していたが、それは歴史のなかで作用していなかったし、自然史における仮説的テーマであった（そしてさらに、誰も電気を意に介さず、知りもしなかったので、電気は歴史的に『無』であった)。」Q 11 § 30C, p.1443-4. 合II, 214頁。（下線は引用者によるが、単純粗雑な読みを避けるためには、その箇所には十分な注意を払うことが必要である）。

なお、これらの言及にみられるグラムシの見地は、マルクス『経哲草稿』「第3草稿」における、「君が自然と人間との創造について問う場合、君は人間と自然とを捨象しているのだ。君はそらを存在しないものとして措定しておきながら、しかもそれらを存在するものとして私が君に証明することを君は要求しているのだ。そこで私は君にこう言おう、君の捨象をやめたまえ…」(岩波文庫, 146頁) という見地に合致していることを、竹村氏とともに指摘しておきたい(竹村英輔『グラムシの思想』青木書店, 1975年, 225頁, 参照)。

### 3. 「実践を転覆する」

だから彼の «rovesciamento della praxis» とは文字通り「実践の転覆」なのであり、そのことは、グラムシ自身が、世界観から行為の実践的規範への移行点について論じている『ノート』のある箇所で、その移行点につき、「それはすなわち、そこにおいて、世界観、観想、哲学が、世界を変革し、実践を転覆することを [a modificare il mondo, a rovesciare la prassi] めざすゆえに、『現実』になる点である」<sup>31)</sup>、と明記していることから疑いのないことなのである。だからまたグラムシが、哲学史について、それを「実践的活動をその総体において変革するための [per mutare la attività pratica nel suo complesso] 一定の階級の人々のイデオロギー的な試みと発案との歴史である」<sup>32)</sup>と言ひ、あるいは、「すでに存在している活動を革新し、『批判的』なものにすることが問題なのだ」<sup>33)</sup> と言うときもまったく同じ意味で言っているのであり、そこで考えられていることは、まさしく「実践（上記『実践的活動』・『すでに存在している活動』）を転覆すること」であり、この意味での「実践の転覆」であることは、あまりに明白であるといわねばならないであろう。

ここまで述べれば、グラムシの「実践」概念と「実践の転覆」概念は、他方のジェンティーレにおける、「活動をおこなって、対象へと固定され」「その本性によって、反転する」という実践の概念およびそうした意味での「実践の反転」概念とはおよそ発想を異にするものであることは明かであると思われる<sup>34)</sup>。もちろん、F第3テーゼの »umwälzende Praxis« を «rovesciamento della praxis» と訳したグラムシの脳裡には、ジェンティーレの先行訳 «prassi rovesciata» があつたことは疑いない。だがグラムシは、その訳を採用しな

31) Q 10 II § 28 C, p.1266. 合 I, 293頁。なおこのA稿 (Q 8 § 210) には、このくだりはない。

32) Q 10 II § 17 B, p.1255. 合 I, 263頁。

33) Q 11 § 12 C, p.1383. 合 I, 245頁。

34) この主題がさらに深められなければならないことも明かである。マルクスFテー

った。彼は、それと異なって「*rovesciamento della praxis*」と訳したのであった。この事実のなかにわれわれは、グラムシのジェンティーレ批判の意図を

ゼの解釈に関しては、すでに第1テーゼの段階で、ジェンティーレは、マルクスの「*Gegenstand*」〔対象〕を、グラムシの場合（Q., p.2357）のように「*oggetto*」〔対象・客体〕と訳するのではなく、「*termine di pensiero*」〔思考の終点・目標・項〕と訳して、観念論的に実践を「思考」に帰着させ、他方、「*attività oggettiva (gegenständliche Tätigkeit)*」〔対象的活動〕については、その注記のなかで説明しているように、それを「すなわち、感性的対象を生み、措定し、創造する活動〔*attività che faccia, ponga, crei l'oggetto sensibile*〕として」（Gentile, *op.cit.* p.145.）と解釈することによって、感性的対象なしの、つまり抽象的な「思考」の活動を、そこから対象的感性的現実が流出する源泉・主体であるかに実体化する傾向を見せ、後の「行為主義的観念論」への道を開いている。こうしたことについて、筆者は、ミケーレ・マルテッリの『政治の哲学者グラムシ』（Michele Martelli, *Gramsci filosofo della politica*, Edizioni unocopi, Milano, 1996. pp.24-27.）から示唆をえているが、上村氏も前掲「唯物論と『反転する実践』」（1997）において詳しく論じられている。

しかし、グラムシの「実践の転覆」概念の捉え方については、マルテッリと上村氏とは相互に対立する立場にある。そして筆者の見解は、上村氏とだけでなく、マルテッリとも異なっている。マルテッリは、「グラムシにおいて実践は、観念論的に『反転する実践〔*prassi che si rovescia*=自らを転覆する実践〕』『転覆された実践』（主観によって意識され-創造された客体）ではなく、唯物論的に『転覆する実践』『転覆的な実践』（主体によって意識され-変形された客体）である」（p.27）ことを強調し、「『実践の転覆』の定式では、限定補語（『実践の』）は、ジェンティーレやモンドルフォとは反対に、客体的ではなく能動的、主体的な意味に解されており、つまり「転覆する実践」に等しい」（p.27）と主張している。だが、マルテッリのこの主張の場合も、彼自身が例示している「実践を転覆する」（前出）というグラムシの文言と合致しえず、成功していないと思われる。マルテッリの基本的欠陥は、(1)（上村氏と同じく）マルクスFテーゼ（第1テーゼ）における「実践」には、一般的な次元の「実践」と特殊な次元の「革命的实践=変革的实践」との2次元が措定されていることの看過、(2)マルテッリ自身が哲学的唯物論の立場にあること自体は問われるべき問題ではないが、グラムシ「実践の哲学」もあくまで哲学的唯物論の枠内にあるはずであると（多くのグラムシ研究者と同じく）自明のごとく考えられており、その結果、グラムシの企図が、固有の哲学用語の意味での唯物論と観念論との分裂の止揚、換言すれば、観念論によって「抽象的にのみ展開され」た（そして、ジェンティーレがその後続くような）「能動的〔*tätige*=活動的〕側面」を再び具体的なものに捉えなおして観念論を無効化し、唯物論をも超克することにあつたこと（注記28も参照）を正當に理解しえていないこと、である。これらのため、結局、マルテッリも、上村氏と同様に、上記(1)の実践の2次元を踏まえて、「能動的、主体的な実践」をさらに「転覆する」実践としてグラムシが「*unwältende Praxis*」を捉え、したがって、その意味においてジェンティーレを「転覆」し「実践の転覆」と訳しえたのだということを明確にしえず、また、「生成としての〔具体的な〕現実」（おそらくこ

こそ読みとるべきでないか。つまりグラムシは、「反転する実践〔*prassi che si rovescia*〕」というジェンティーレ的解釈をまさにそこで「転覆」したのであった、ということである。

確かに上村氏も、論稿「唯物論と『反転する実践』」<sup>35)</sup>においては、『ノート』におけるグラムシの『反ジェンティーレ』の立場<sup>36)</sup>を確認され、Fテーゼの「対象的活動」概念の解釈など、実践概念についても、「思考主体による思考対象のフィヒテ的な意味における自己生産活動」<sup>37)</sup>というジェンティーレのそれや、モンドルフォのそれなどと、グラムシのそれとの相違を問題にされているだけでなく、前出「世界を変え、*rovesciare la prassi*をめぐし」というグラムシの文言を引かれ、そこでは「“prassi”が“rovesciare”の目的語になっていること」に「着眼」<sup>38)</sup>さえもされている。だが結局のところ、「実践を反転させる」は「実践が反転する」と「同じこと」<sup>39)</sup>と、ジェンティーレ（およびモンドルフォ）的な解釈路線にひきもどして解されるため、どこまで行ってもグラムシの«*rovesciamento della praxis*»そのもののうちに、反ジェンティーレ的含意は抽出されえないどころか、むしろ「反転す

---

れは、注記6の«*realità effettuale*»につながる）というグラムシ固有の現実観とその独創性との関連からも論じえないで終わっているのだ、と筆者としては言わざるをえない。

なお、「*rovesciamento della praxis*」をめぐっては、かつて拙論『『実践の哲学』の地平』（松田博・鈴木富久編『グラムシ思想のポリフォニー』法律文化社、1995年）で「実践の転覆」という行為の対象となる「実践」を、ある意味で「慣習的行動」と解しようと述べたことにも関連し、「実践という転覆」と訳さるべきとの批判を受け、筆者がこれに反批判（『『実践の転覆』は誤訳か—グラムシ拙論への批判に答えて』『季報唯物論研究』55号、1995年12月）で応答したことがある。そこにおいて実はすでに上村氏の「実践の反転」訳についてもわずかながらふれているのであるが、グラムシの「実践」概念そのものについては、今後の探究課題として残した。したがって本稿は、その課題にたいするみずからのその後の探究の現時点における一表現としての意味をもつ、と筆者自身は考えている。

35) 前掲、注記18、参照。

36) 同上、115頁。

37) 同上、110頁。

38) 同上、115-6頁。

39) 同上、104頁。

る実践〔prassi che si rovescia〕という解釈路線のさらなる鮮明化を意味するかに、「実践の反転作用」と表現されるにいたる。したがって結論的には、グラムシの「rovesciamento della praxis」も「ジェンティーレからモンドルフォにいたる系譜のなかで解釈されてきたのと同じ『実践の反転作用』の意味でありながら、その『反転』構造の理解において…立場を根本的に異にしている<sup>40)</sup>と、つまりあくまでジェンティーレ的な枠付け内部での「根本的」(?)相違にすぎない、ということになる。いまやグラムシの矮小化あるいは異質化と言わざるをえないこの帰結も、けだしジェンティーレの解釈に「すっかり感じいってしま」われた氏としては、当然の帰結ではあろう。

### む す び

ともあれ以上において、第1に、「進歩と生成」(Q10・§48B, II)最終段落の人間論に関する論述については、その全文を改訳し、第1章に掲げたが、その訳文の〈a〉〈b〉の2箇所については、先行訳を検討し、筆者の立場と理由を明らかにした。〈a〉については、文中の「寄与すること〔contoribuire〕」をどう見るかという点の解釈にかかわり、〈b〉では、「歴史的ブロック」としての「人間」の構成要素を2種として読むのか、3種として読むのか、が焦点であった。

行論のなかで明かにしたように、この構成要素の1つである「個人」と、他の構成要素(2種)との関係は、当の個人がとり結ぶ「活動的關係」であり、当の個人がこの活動的關係において自己を一つの「歴史的ブロック」に構成し、それにより歴史具体的な一個の「人間」(歴史具体的な個人と言い換え可能)に「成る(生成する)」というのが、グラムシの人間概念であった。それゆえ、活動的關係の概念は、グラムシの人間概念の中心概念と解しうるのであるが、実はこの活動的關係の概念は、マルクスF第1テーゼにお

---

40) 同上, 118頁。

ける「実践」の概念に重なり、それと同義でもあった。そこでグラムシは、「実践」を中心概念とした第1テーゼの主体的・実践的な「現実」観を、人間の活動的關係を通じた実践的「生成」としての「現実」観として捉え、この現実を変革する特殊な実践、すなわち »umwälzende Praxis« (変革的实践) を、ラディカルに、既成の現実を生成させている既成の実践様式を転換させること、すなわち「実践を転覆すること [rovesciare la prassi]」として再把握したのであった。人間の実践(対象的实践, 活動的關係)を通じた人間自身と現実の同時具体的生成、これがグラムシの人間観であり、現実観である。

それゆえに、第2に明らかになったのは、もともと »umwälzende Praxis« の訳語として始まったグラムシの語 »rovesciamento della praxis« を「実践の転覆」と訳すのは至当であり、これを「実践の反転」という訳語に置き換えることは適切とは考えられえない、ということである。後者の訳語は、その提起者の意図はどうかであれ、グラムシをある点でジェンティーレに引き戻し、やがて行為主義的観念論を打ち上げてついにファシズム理論家として立ち現れた彼に対決するグラムシの思想的営為の独創性を矮小化する効果をもたらさざるをえないような訳語である、と言わねばならないであろう。

以上のことからまた、何ゆえに、如上の第1の問題〈a〉、〈b〉と第2の問題という一見無關係にみえる二つの問題を並べて取りあげたのか、その理由もすでに明らかであろうと思われる。要するに、『ノート』において、人間論における「活動的關係」の概念と、現実と人間との具体的なものとしての生成を媒介する「実践」の概念とは同義性を有しており、この「実践」を「転覆すること」が「実践の転覆」であって、それは上の「実践」概念の必然的な系以外ではありえず、これらのグラムシの観点はすべて彼がFテーゼに読みとった論理の核心を表わすものであったからにはほかならない、ということである。

『ノート』におけるグラムシの思想を正確につかむためには、確かに、多様な思想史的影響關係の探究は不可欠であり、「実践の反転」訳や「倫理

的社會」訳等の提起者が、わが国においてこの面で独自の寄与をされているといえるにしても、あれこれの先行ないし関連諸思想に囚われ、それが先入見になれば、かえって誤読・誤解の一因になる。グラムシの用語としての«società civile»をあえて「倫理的社會」と訳す試みについては、特にクロッチェとの関係をどう読むかが問題となる。だが、さすがにこの訳語を採用する動きはほとんどみられないこともあり、本稿では、この問題を論外とした。

グラムシにおける「市民社會〔società civile〕」の問題は、彼の«società regolata»をいかに理解し、いかに邦訳しうるかの問題に密接につながっており、それはそれで、獄中のグラムシが抱いていた将来社會像の問題に包括される。そこで筆者としては、『ノート』における将来社會像の解明を次の課題とし、そこで«società regolata»の訳語問題や「倫理的社會」訳の問題も検討する予定である。

【付記】本稿が成るまでには、京都グラムシ研究会とその方法論部会のメンバーおよびその他の諸氏から少なからぬ示唆、教示を得ている。松田博氏からは、若干の資料の提供も受けえた。ここに記して各位に謝意を表したい。勿論、本稿の責任はすべて筆者にある。

## Issues of Translation of Some Gramsci's Phrases

Tomihisa SUZUKI

This paper deals with problems of how to read the following Gramsci's texts and his phrase in his Prison Notebooks(Q.).

- 1) Text1. «contribuendo a modificare l'insieme delle condizioni concrete che realizzano questa volontà nella misura dei propri limiti di potenza e nella forma piú fruttuosa.» (Q.10II, 48, II, p.1338)
- 2) Text2. «L'uomo è da concepire come un blocco storico di elementi puramente individuali e soggettivi e di elementi di massa e oggettivi o materiali coi quali l'individuo è in rapporti attivi.» (Q.10II, 48, II, p.1338)
- 3) Phrase «rovesciamento della praxis»

The conclusion of the examination is as follows:

- 1) Text1 should be read «by contributing to modify ----to the extent of one's own limits and capacities and in the most fruitful form».
- 2) Text2 should be read to mean that a historical block consists of not two categorical elements, but three categorical ones: «elementi puramente individuali e soggettivi», «elementi di massa» (other members of collective) and «elementi ----oggettivi o materiali».
- 3) The «praxis» is as an object of «rovesciamento» (overturn) in the phrase «rovesciamento della praxis» so that the phrase indicates to overturn (revolutionize) the «praxis». It doesn't mean that the «praxis» overturns by itself.

Key words: Gramsci, man, active relation, praxis, overturn of praxis